折口信夫における短歌と身心変容　　　　　　　　　　　　　　　2016/01/28　安藤礼二

●研究者にして創作者

折口信夫（1887-1953）と釈迢空

折口信夫の『古代研究』（研究書）、釈迢空の「身毒丸」（戯曲）、『海やまのあひだ』（短歌）、『死者の書』（小説）、『古代感愛集』（詩）

●『言語情調論』と「妣が国へ・常世へ」

間接性の言語と直接性の言語、「包括的→仮絶対→曖昧→無意義→暗示的→象徴的」

熊野への「旅」→現在の知覚と過去の記憶、個人の知覚と種族の記憶

●「たゆたふ命」

「家にてもたゆたふ命。波の上に漂きてしおれば、奥処知らずも」

→「傑作」、「此歌思想に於て優れて居る」（『口訳万葉集』）

●「叙景詩の発生」

「古の人に我あれや。漣の古き宮処を見れば　悲しも」（高市黒人）

→「旅」と「宴」、「景」と「情」（「情景の融合」）、「叙景」と「狂気」

●「海やまのあひだ」→「音」の写生、現実の旅と虚構の旅

「葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」（「島山」）

「人も　馬も　道ゆきつかれ死ににけり。旅寝かさなるほどの　かそけさ」（「供養塔」）

「うづ波のもなか　穿けたり。見る見るに　青蓮華のはな　咲き出づらし」（「夜」）

「水底に、うつそみの面わ　沈透き見ゆ。来む世も、我の　寂しくあらむ」（同）

「心　ふと　ものにたゆたひ、耳こらす。椿の下の暗き水おと」（「我孫子」）

「白玉をあやぶみ擁き　寝覚めして、春の朝けに、目うるめる子ら」（「生徒」→フランク・ヴェーデキントの『春の目覚め』）

「青うみにまかがやく日や。とほどほし　妣が国べゆ　舟かへるらし」（「奥熊野」）

「波ゆたにあそべり。牟呂の磯にゐて、たゆたふ命　しばし息づく」（同）

●「死者の書」

闇の洞窟から光の曼陀羅へ、「珊瑚礁」の身体、「たま」と「たましひ」

●詩語としての古語、詩語としての未来語

「次の詩形」の探究→「詩語としての日本語」（小林秀雄のランボー）、「俳句と近代詩」